

主こそ喜びの源

ネヘミヤ 8章1～12節
2023年7月30日
松田 基子 師

聖書は、

『わたし達に創造主である真の神様は、どの様なお方なのか。神様の御心は何なのか』を、教える書物です。それは、神様と全人類のパイプ役に選ばれた、イスラエルを通して、その歴史の中に働いてこられた彼らとの関係を通して明らかにされました。

では、その歴史はどうだったのでしょうか。神様はエジプトの奴隷であったイスラエルを、神の民に育てる為に、出エジプトを果たさせ、荒れ野で訓練されましたが、彼らは自分達に都合が良ければ神様を喜び讃え、自分達に都合が悪かったり、忍耐を求められると、忽ち不平不満、呟きの合唱となったのでした。

彼らは当然、神様から間違いを正され、愛の鞭を受けなければなりません。パウロはその事について、コリント第一の手紙10章10節で、
「彼らの中には不平を言う者がいたが、あなたがたはそのように不平を言うてはいけません。不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました。これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです」と言っています。

彼らと少しも変わらない、自己中心の心を持っているわたし達は、イスラエルの歴史を通して、自分の神様に対する思い、姿勢、態度、不遜、不信仰を正されなければなりません。聖書に記されている事は皆、他人事ではありません。わたし達は当事者として、聖書の警告を受け入れなければなりません。しかし、そこで大切な事は

『神様は決して、人間の罪をうやむやにされる事はなく、罪を犯せば罰せられますが、決して見捨てられる事は無く、神様に立ち帰り、聴き従う事を何処までも求められるお方です。

わたし達の思いに優る、愛のお方である』と言うことです。

神様はそのご自身に、全信頼することを一番喜びとしておられます。この事はイスラエルの歴史の中に、はっきりと示されています。イスラエルはその歴史のどん底で、前587年にバビロニアに滅ぼされ、国を失い、バビロン捕囚を経験しました。捕囚は3回に渡ってユダ王国の要人、技術者を初め、有能な人々が、総計一万から一万五千人位、バビロンに連行され、バビロニア帝国の為に仕えさせられました。

一方エルサレムとユダの地には沢山の農民、労働者、奴隷が残されました。ところで捕囚に連れて行かれた人々の中には、信仰の指導者である、祭司やレビ人、そして、信仰篤き人々がいました。彼らは捕囚の地で、信仰を失う様なことはありませんでした。彼らは国の指導者達の悪政と、民衆の不信仰、不従順の結果、国が滅亡した事に対して、恨んだり、憎んだりはしませんでした。それよりも彼らの罪を執り成し、民族全体の罪の赦しを神様に求めて、神様の愛と憐れみに縋り、
『神様は必ず国を回復させて下さる』事を信じました。

捕囚の地で活動した第二イザヤと呼ばれる預言者は、イザヤ書の49章14節から、捕囚の民に、神様の御心を伝えました。

「シオン(エルサレム)は言う。主はわたしを見捨てられた。わたしの主は、私を忘れられた、と。女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の生んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。見よわたしはあなたをわたしの手の平に刻みつける」

と神様の愛の確かさを訴え、神様に全信頼して回復の時に、備える事を勧めました。あの、捕囚直前まで預言活動を行ったエレミヤも、エレミヤ書29章10節で、

「主はこう言われる。

『バビロンに70年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは

恵みの約束を果たし、あなたたちを
この地に連れ戻す』

と預言しました。

彼らは神様のこの言葉を信じて、捕囚の直中で、
『今、自分達が成すべき事は何か』
を考えました。

『今度こそ、神様に聴き従う国作りをしよう』
と。その為に神様から自分達に与えられている
律法の整備、そして自分達を選んで下さった神様
に対して、

『イスラエルはどの様な応答をしてきたのか』
これまで受け継いで来た膨大な資料を基に、歴史
の編纂をして、後の世代が、

『この様な過ちを繰り返す事がないように』
しようと、聖書の編纂に当たりました。

さて、歴史は神様の御手に握られている事がや
がて明らかになりました。権勢を誇ったバビロニア
も、前539年、ペルシャのキュロスに滅ぼされ、
キュロスは全ての捕囚民に、解放令をだし、母国に
帰還することも、その地に留まる事も許しました。
前538年、心ある信仰者達はエルサレムに帰って
来ました。彼らの目的は、破壊された神殿を再建
する事でした。当初、近隣の反対妨害に合っ
て、工事を進める事は出来ませんでした。前515年
に神殿は完成しました。

でも、それはあのソロモンが建てた、壮麗な神殿
とは雲泥の差でした。しかし、そこで、神様への
礼拝が出来る事は、大いなる喜びでした。一方
ペルシャのユダヤ人地区に於いては、聖書の編纂
が進められていました。世代は既に子や、孫の時
代になっていました。捕囚の地で生まれ育った
アロンの子孫であるエズラは、祭司であり、律法学
者でした。彼は、前458年にエルサレムの信仰を
立て直しに、ペルシャから帰国して、律法を教え、
民を悔い改めに導きました。

エルサレムの再建に尽力した人が、もう一人いま
した。それはペルシャ王の献酌官として活躍して
いた、ネヘミヤです。献酌官と言うのは、王が飲
むぶどう酒の毒味をする人で、王の側近として高い

地位にあり、王の信任を得ていました。ネヘミヤ
はペルシャ王アルタクセルクセス一世に仕えていま
した。その治世の第20年、前445年に、ネヘミヤ
は祖国の状況をユダの地からやって来た兄弟達か
ら知らされました。ネヘミヤ記1章3節に、

「捕囚の生き残りで、この州に残っている
人々は、大きな不幸の中にあつて、恥辱を
受けています。エルサレムの城壁は打ち
破られ、城門は焼け落ちたままです」

との報告を受けました。バビロニアのエルサレム
破壊から早や140年も経っているというのに、破壊
されたまま放置されていると言うのです。

『ユダヤ人の神は何も出来ないではないか』
と、周囲の国々から軽蔑され、御名が汚されてい
るのです。

ネヘミヤには、何としてでも、神様の御力を得
て、城壁を修復し、エルサレムを再建し、神様の
御名を讃えたいと言う切なる願いが起きました。
ネヘミヤはこの事の為に4ヶ月間、切なる祈りを献
げました。ネヘミヤの憂いは、王の察するところと
なり、王はネヘミヤに、エルサレム総督の地位を
与え、ユダに行き着く迄の通行証と、必要な材木を
得る書状を与えてくれました。ネヘミヤの一行は、
将校と騎兵に守られて、無事にエルサレムに到着
しました。

しかし、ネヘミヤのエルサレム城壁修復計画は、
それまでユダの地から利益を得ていたサマリヤ総
督のサンバトと、利益共有者達の怒りを買うところ
となりました。彼らはその後、悉く(にとごとく)反対、攻
撃、策略を以て、工事を止めさせようとしてしま
した。城壁は石で築かれています。発掘によりますと、
一番下の石は、ダビデがエルサレムを攻略する前
からの物だそうです。時代を追って積み上げられ
て来たものです。それは全部が崩されているので
はありません。何十箇所も崩された所があり、非
常に不用心なのです。ネヘミヤ達が愈々(いよいよ)
工事に掛かりますと、サンバトを初め、周りの国々
が皆で共謀してエルサレムに攻め登り、混乱に陥
れようとしていました。

困難は外敵ばかりではありませんでした。

4章4節には、

「ユダもこう言うのだった。

『もっこを担ぐ力は弱く、土くれの山はまだ大きい。城壁の再建など、わたしたちにはできません。あなたたち達が戻ると、あらゆる所からわたし達は攻められます』

と言って迷惑がられています。しかし、ネヘミヤは、これらの妨害や反対、士気を挫く言葉に、自分の心を萎えさせる事はありませんでした。彼は、

『神様に喜ばれる事はなにか。自分がしなければならない事はなにか。』

神様を仰いで唯、この一事に心を注ぎました。彼は神様にのみ全信頼していたのです。城壁修復工事は、敵の攻撃から身を守りながらの大変な作業でした。4章7節から見ると、

「そこで私は城壁外の低い所、むき出しになった所に、各家族の戦闘員を、剣と槍と弓を持たせて配置した。私は見回して立ち、貴族や役人やその他の戦闘員に言った。

『敵を恐れるな。偉大にして恐るべき主の御名を唱えて、兄弟のため、息子のため、娘のため、妻のため、家のために戦え』

と励まして、工事を進めました。

この様にして、祈りに祈り、工事に集中し、52日間を懸けて、城壁を修復し、焼け落ちて放置されたままになっていた城門を取付け、何処からも進入できない、堅固な所となりました。ネヘミヤも工事に当たったユダヤ人達も、神様の助けと守りなくしては成し遂げ得なかった事、あらゆる困難を乗り越えさせて下さった神様を誉め讃えて、盛大な落成式が行われました。これでめでたしメデタシではありません。ユダヤ人には神様から選ばれた民としての使命があり、神様に聴き従って行くこと無しに、民族の存続と幸せはありません。その為には、エルサレムの町が、神殿を中心に、神様への礼拝、祭儀を怠ることなく、律法に従った生活をしなければなりません。そこで必要な事は、律法の教育でした。

その務めに当たったのは、律法学者エズラでした。レビ記の23章24節には、

「イスラエルの人々に告げなさい。第七の月の

一日は安息の日として守り、角笛を吹き鳴らして記念し、聖なる集会の日としなさい」

と命じられています。今朝の聖書箇所ネヘミヤ記8章には、その為の集会が開かれたことが記されています。8章2節には、

「祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解する事の出来る年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日の事であった」

とあります。

ところで、旧約聖書の第一区分である、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記は、モーセ5書と呼ばれる律法書ですが、それは捕囚の地に於いて、イスラエルに受け継がれて来た資料から整理され、編集されました。当時エズラはその律法の第一人者でありました。彼は律法に従って神様に聴き従う新しいイスラエルの国造りを指導しました。今日のように、誰もが聖書が持てる時代ではありませんでした。エズラが高い台に立ち、律法の書を読んだのですが、律法はヘブライ語で記されていました。しかし、当時、ペルシャを初め、中近東における日常会話は、アラム語でした。そこで、エズラが、律法の一段落を読みますと、レビ人が集団毎に受け持って、アラム語に通訳し、その説明をすると言う仕方です。律法が教えられました。

民は皆真剣に聞いていましたが、聞いている内に彼らは泣き出してしまいました。民衆は何故泣いたのでしょうか。それは、自分達が神様から命じられた律法とは、ほど遠い生活をしてきた事が分かり、深く心を探られ、神様の前に泣いて侘びる以外に何にも出来なかったからです。ネヘミヤとエズラは、その民衆を見て、レビ人を促し、共に、8章9節で、

「今日は、あなた達の神、主に捧げられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分けてやりなさい。今日は、我らの主に捧げられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」

と、力強く励ましました。

主を喜び祝うとは、一体どう言う事でしょうか。それは神様御自身が、どの様なお方であるかをよく知って、その溢れる愛と慈しみに気付き、神様を愛し、全信頼することです。それは神様が良いことをして下さったから喜ぶのではなくて、

『**神様御自身の存在そのものを喜んで、**
良い事も、悪いことも、神様の**最善**を信じ
て、神様に**全信頼**し、神様は素晴らしい
と**誉め讃える**ことです。』

神様はイスラエルの歴史を通して、ご自身がどの様なお方であるかをお示しになりました。神様はイスラエルが、ご自身に叛いた(そむいた)時、捕囚に渡されましたが、それは彼らが**真の信仰に立ち返るため**でした。神様は彼らを決して見捨てられる事はありませんでした。

約束された通り、エルサレムへの帰還、神殿再建、城壁修復、信仰復興を果たさせて下さいました。ところで、神様の真実は、そこで終わった訳ではありません。**神様は**、それから約400年後、アブラハム、ダビデに**約束された通り**、人類の真の祝福の源、人類を永遠の滅びから救い出して下さる、**救い主をお与えになりました**。そのお方は、何と**神の御子**であられました。全人類の神様への叛きの罪が贖われる為には、全人類の価値に優る神の御子以外に、人類を贖う力はなかったのです。

「**神はその独り子をお与えになった程に世を愛された。**」

の御言葉の通り、**神様の人類への最大の愛と真実**は、ここに現されました。今日の私たちには、ネヘミヤ、エズラ時代には想像もできなかった神様の愛と真実が明らかになったのです。

では、わたし達は今、何を喜びとしているでしょうか。健康ですか。富ですか。功績や、名誉でしょうか。考えてください。それらの物はあなたが、この地上を去って行くと共に、無くなってしまいます。人生の目的は何でしょうか。それは

『**自分の命の与え主を知り、その神様の御心に従って生きること**』です。

しかし、罪の根を持つ人間、誰一人として神様の

御心に従い通すことは出来ません。本来人は皆、永遠の滅びに向かう以外になかったのです。

そんなわたし達の罪を、一身に引き受け、神の御子の値を差しだして、十字架に架かり、**わたし達の罪を贖って下さったのが、イエス・キリスト**です。生も死も越えて、私の存在を保証して下さるのはイエス・キリストであり、**父なる神様が歴史をそのように導かれた**のです。

新聖歌の346番に

“ 賜物より 癒しより
与え主(ぬし)ぞ さらに良き
わがすべての すべてなる
主をば崇めん 永遠(とこしなえ)に ”
と歌われています。

自分の願いが叶えられるから、神様を喜ぶのはありません。私を永遠の滅びから贖って下さった神様である事を信じ、全信頼して、**自分の生も死も喜んで委ねる**のです。こんな生き方をさせてくださる、命の道を歩ませて下さる神様を、**喜ばずにはいられません**。

ここに信仰の土台を置く時に、わたし達は人生のどんな問題も乗り越えることが出来ます。わたし達には真の喜びと、力の源が示されているのです。神様を全信頼し、信じて、賭けて、**真の喜びに生かされ、地上の旅路を歩み抜いて参りましょう**。

お祈りを致します

わたし達を限りなく愛して下さる天の父なる神様

罪深い私達に目をとめ、イエス・キリストの御救いをお与えくださり、何と感謝申し上げて良いか分かりません。

私達は、ただ唯、あなた様に全信頼し、生も死もお委ねいたします。ここに奪われることの無い真の喜びがあり、力があります。さらにあなた様の愛を見出し、更にご自身を喜ぶ者とならせて下さい。

主イエス・キリストの聖名によってお祈りを致します。

アーメン。